

大人も一緒に
子どもたちの劇場シリーズ 2011
Theater for Children Series

「スガンさんのやぎ」

恒例の「大人も一緒に 子どもたちの劇場シリーズ」。今年はその中に初の海外からの演目が登場する。「スガンさんのやぎ」。自由を欲したら、その結末は？—そんなメッセージ性を含んだフランスの童話を舞台化したものだ。演出を手がけるのは、フランスのカーン国立演劇センター・ディレクター、ジャン・ランベール＝ヴィルド。ランベール氏とは友人でもある九州日仏学館（福岡市）のマテュー・バルディオ館長に、この童話について伺ってみた。

「フランスでは、誰もが子どもの頃に必ず読む童話です。もちろん、私も。一見シンプルでナイーブな子ども向けの内容ですが、深く掘り下げるとさまざまなテーマが盛り込まれています。一つは、自分の運命を決めるのは自分であるということ。決まり事への違反、人生のはかなさ、死、自由。今まで守られていたところを打ち破って外に出て行く冒険心、子どもが大人に成長していく過程での難しさ…。少し具体的に言うと、おおかみに象徴されているのは、大人であり社会。人間の子どもの部分的な部分をやぎに例えると、現実の社会で生きて行くためには、そのやぎの部分の殺しておおかみに、つまり大人にならないといけない。いつまでも子どものままではいられませんからね。これらのテーマがとても美しい文体で描かれており、私はフランスの文化遺産ともいえる童話だと思います。童話の中では動物性を使って人間を表現していますが、ランベールの作品では人間を使って動物性を表現している。その違いもおもしろいと思います」

舞台美術を担当するのは、ブラックな作風が日本でも注目を集めるグラフィック・アーティスト、ステファヌ・ブランケ。彼が創る美しくも毒をはらんだ舞台世界にも注目したい。子どもなりに、大人なりに、観終わった後にはどんなことを語り合いたくなるのだろうか。

未来を担う子どもたちへ、 今、手渡したいもの。

【日×仏 館長対談】

私たち大人が今、これからの未来を担う子どもたちに手渡せるものは、何なのでしょう？ 個人や社会の価値観が大きく変わろうとしている今だからこそ、改めて考えてみたい問いかけがあります。日本ではどうなのでしょう？ そして世界、たとえばフランスでは？ 今年度の子どもたちの劇場シリーズに、フランスの作品「スガンさんのやぎ」が盛り込まれることにちなんで、九州日仏学館のマテュー・バルディオ館長と、北九州芸術劇場の館長・津村卓に、それぞれの想いを語ってもらいました。

津村 子どもの時から質の高い作品に触れる機会を、そして親子で劇場に足を運んでもらうきっかけになれば、と始まった子どもたちの劇場シリーズ。シリーズ初の海外作品として上演する「スガンさんのやぎ」は、子どものための童話とはいえ、決して幼児のための話ではなく、時代や社会的な背景を踏まえて、子どもたちに今、何を提示して行くべきなのかが深く掘り下げられていますね。おもしろいと思ったのは、童話の中では、大人であったり敵であったり災害であったり、何か弊害をもたらすものはどこの国でも結構「おおかみ」を使って表現される

んだなあ、と（笑）。ですが、「スガンさんのやぎ」に出てくる大きなモチーフである“自由”という部分は、日本の中ではあまり馴染みのない世界です。そこに国の違いや、この作品の童話としてのクオリティの高さを感じました。日本の子どもたちにどのように受け入れられるのかも楽しみです。

バルディオ 日本の学校教育の現場に何度か伺ったことがあるんですが、日本では子どもたちの反応があまり見受けられないように感じたことがあります。もちろん十分な知識や学習すべきことは与えられているんですが、それに対する反応が、という意味です。たとえばフランスの幼児教育の現場では、小さい頃から「自分の考えをいかに表現するか」ということに比重を置いています。学ぶというよりも、個人個人が自由に表現することを大切にしている。どちらが良いというわけではありませんが、そういう違いはあると思います。

津村 そうですね。日本では今、子どもたちが自分を自由に表現したり、コミュニケーション能力を身につけることの大切さが認識されてきていますが、そこで必要とされるのがイメージーションや創造力。これらを育むために、芸術文化が果たす役割は非常に大きいと思います。日本でもこの10数年でそのことへの理解が深まっており、アーティストが学校に出向いて表現活動を行うアウトリーチや、市民にひらかれたワークショップなどが積極的に行われるようになりました。

バルディオ 子どもたちの育成のために芸術文化を、という考え方は非常に共通していると思います。ただ、フランスと日本を比較した場合、国が芸術文化にかけている予算の違いも影響しているかと思っています。フランスは日本の人口の約半分ですが、国が芸術文化にかけている予算は約3倍。そのことが全体的な芸術文化施設の数、さらには演劇やコンサートや展覧会の観覧料にも影響していると思います。また、フランスには450ほどの公共の美術館がありますが、そういう場所では積極的に子どもたちのためのプログラムや取り組みを行っています。世界遺産の建築物を見学に行ったり、美術館に行ったり。そういう取り組みを国の機関が支援しているのです。

津村 フランスは芸術文化に関する教育プログラムがとてもしっかりしていますね。私は芸術や文化というものは、人間が生きて行く上で絶対に必要なものだと思うんです。ですが、戦後の日本の社会環境の中では、芸術や文化は特別なことと位置づけられ、生活とは切り離されたところに置かれてきた。それが、今の子どもたちの現状につながっていると思うんです。本当に心豊かな人生、生きていく幸せを実感できる生活には、イメージーションや創造力は欠かせません。そして、そういう豊かさを実感できる大人になるためには、やはり子どもの時からそういう経験を積んでいかないといけない。そのためにも、大人も一緒に楽しめるレベルの良質なアートを、今、子どもたちに提供していく必要があると思います。もう一つ、よく劇場や美術館は非日常の空間と言われますが、私は、劇場や美術館は日常に溶け込んだ空間で、中で行われていることが非日常だと思っているんです。ですから未来を担う子どもたちにも、そして大人たちにも、「劇場や美術館は普段の生活のすぐ横にあるもの」ということを理解してもらえたら、と思っています。

バルディオ 私もまったく同感です。文化的な活動というのは、何か特別なものではなく、ごく自然に発生するものでなければ。芸術文化に自然と触れている子どもたちは、自分の考えや自己を表現する力がとても豊かになります。演劇を観る経験は非常に繊細な心を育みますし、舞台から感じ取ったものから、さらに自分のイメージーションの世界で何かを表現しようとする動きも生まれます。大人はある程度考え方が固まってしまっているところもありますが、子どもたちは目にするすべてを吸収します。ですから、芸術文化が子どもたちに与える影響も大きい。津村さんがおっしゃったように、心豊かな人生の創造にも役立つと思います。その一歩

を支えるのが、「知る」—知的な好奇心というものだと思います。たとえば、演劇を「知る」、楽器の弾き方を「知る」、今回の「スガンさんのやぎ」のように昔から伝わる童話を「知る」。この「知る」という行為は、他者との関係性を培う点でも役立ちます。「スガンさんのやぎ」では、舞台を観た後の親子の対話も重要だと思います。その作品を観ることで生まれる、他者との関係性、あるいは親子の距離感なども大切だと思います。

津村 これも日本だけではないかもしれないのですが、一般に「分かりやすいものを良い」とする風潮があると思うんです。ですが、分からないものを考えてみる。分からないもののおもしろみを探ってみる。こういう動きも大切ですよ。バルディオさんがおっしゃった「知る」ことへの欲求も然り。だからこそ、一見分かりにくいかもしれないけれど、良質な舞台や音楽や美術を提供し続けることは大切だと感じています。

バルディオ 子どもたちは、自分たち自身でそれを選んで観たり聴いたりすることができませんから、大人たちがそのような機会を与えることが大切です。そこから、もっと知りたいという欲求も生まれてきますから。心豊かな人生とは何か、と考えると、そこには必ず文化的なものが必要です。経済だけでは、人は幸福になれない。ですから良質な芸術文化は、子どもだけでなく大人たちにも必要なんです。

津村 本当にそうですね、まさに「大人も一緒に」。私の個人的な夢ですが、北九州市が将来、フランスのナント市のようなになったらいいな、と思っているんです。ナント市は、北九州市と同じ元々工業都市だったのが、工業と共に衰退してしまった。そこから「ラ・フォル・ジュネ」という音楽祭をきっかけに、都市の経済までもが再生されたと聞いています。世界には、芸術文化で街が変わるという事例もたくさんあります。だからこそ、子どもたちに、そして大人も一緒に。まずはさまざまな機会に、芸術文化に触れてほしいと願っています。

■マテュー・バルディオ氏 Matthieu BARDIAUX

フランス・ヴィシー出身。

ボルドー・ビジネス・スクールでマネージメントを学び、大学の博士課程(DESS)で国際関係学を研究。その後、大使館関係の仕事で、様々な国に赴任。中欧のハンガリー（ブダペスト）とセルビア（ベオグラード）でフランス文化機関の仕事に従事した後、2007年に九州日仏学館の館長に就任。

■九州日仏学館とは…

1975年の創設以来、30年以上にわたり、福岡とその周辺地域にフランスとヨーロッパを紹介し、日本文化とフランス文化の交流促進を行っている。フランス語講座や文化セミナー（生活芸術、ガストロノミー、美術史、映画史など）の実施、フランス情報センターとしてのメディアテークでの情報発信に加え、講演会、舞台、展覧会など、年間を通して様々なプログラムを行っている。

■津村 卓 TSUMURA TAKASHI

北九州芸術劇場・館長兼チーフプロデューサー。大阪芸術大学卒業。'85年大阪ガスの扇町ミュージアムスクエアを企画し、副支配人兼プロデューサーに。'87年より兵庫県伊丹市の伊丹市立演劇ホール（アイホール）チーフプロデューサー。'97年よりびわ湖ホールの演劇部門に関わる。'95年より現在、財団法人地域創造に所属。芸術環境部プロデューサー。'00年より北九州芸術劇場に関わり、劇場のハードソフト両面の総プロデュースを手がける。